INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN

IMAJ ニュース NO.83

(社)国際MRA日本協会機関誌

発行年月日　1997年3月31日
発　行　所　(社)国際MRA日本協会
〒150 東京都渋谷区恵比寿南3-7-5
東光苑マンション802
TEL:03(5721)6861
FAX:03(5724)6880
発　行　人　住友　義輝
編　集　人　加藤　保之
頒　　価　1部200円

◇コー50周年記念世界大会特集号

『過去を癒やし、未来を築く』

Healing The Past — Forging The Future

●1996年6月29日～8月25日

設立五〇周年を迎えたコー・マウンテンハウス

ジュネーブから車で一時間半、眼下にレマン湖を望むドッシェ・ド・ネ山中腹の村コー（Caux）に、MRA世界会議場「マウンテンハウス」があります。

一九四六年（終戦の翌年）以来、毎年、世界各地から集まった多様な人種・宗教・職業の人々により、世界中の様々な問題が話し合われてきたこの会議場は、昨年の夏に設立五〇周年を迎えました。

●MRA世界会議場コー・マウンテンハウス

マウンテンハウスの歴史

●マウンテンハウスの前身、コー・パレス

マウンテンハウスは当初、ヨーロッパ屈指の高級リゾートホテル「コー・パレス」として一九〇二年に建てられました。その最盛期には、ジョン・D・ロックフェラー、後にサウジアラビア王に即位したイボン・サウド王子、バイオリニストのイザイを初めとする音楽界・演劇界のスター達、スリラー作家のエドガー・ワラスなどが宿泊しました。スケートの金メダリストも、コーでトレーニングを行いました。ボブスレーやアイスホッケーの世界連盟が設立されたのも、コーです。山上からの斜面は、（当時はまだ目新しいスポーツであった）スキーを試す最も難しい場所として評判になりました。

しかし時代の移り変わりとともに、隆盛を誇ったコー・パレスも、第一次世界大戦中は五年間の閉鎖を余儀なくされ、莫大な損失を蒙りました。その後再開されはしたものの施設は相当痛んでおり、大規模な修復が必要とされました。改装に必要な資金が集まったのは一九二九年になってからのことでした。しかし時すでに遅く、大恐慌の波が押し寄せ、第二次世界大戦が勃発しました。コー・パレスは、一九四四年五月から翌四五年七月まで、イタリアから逃げてくるイギリス人とアメリカ人の捕虜や、ハンガリーのユダヤ人亡命者などの収容施設として使われました。

戦争によって分断されたヨーロッパと世界に融和をもたらす場所

やがて戦争は終結し、ヨーロッパにもようやく平和が訪れました。しかし、長年にわたる戦争の結果ヨーロッパの国々は疲弊しきっており、社会の制度や秩序は完全に崩壊していました。

第二次世界大戦後間もなく、スイスのインターラーケンにおいて、あるスイス人グループの主催による会議が開かれ、ヨーロッパ一二ヶ国から約一八〇名が参加しました。彼らは—オックスフォード大学の学生と、アメリカ人でルーテル教会の牧師であったフランク・ブックマン博士との意見交換や交流から始まったインフォーマルな平和運動である—MRAのグループの人々でした。

このインターラーケン会議の責任者の一人に、フィリップ・モチューというスイスの若い外交官がいました。彼は、「戦禍をまぬがれたスイスは、分裂してしまったヨーロッパの融和と世界の平和のために、世界中の人々が集える場所を提供すべきである」という信念を持っていました。戦争による苦しみや憎しみで寸断されたヨーロッパ、そして世界各国の人々が一堂に会して、昨日まで敵だった相手との関係を修復出来る場所を作ろうというのです。

ある時モチューは、レマン湖畔の山腹に建つコー・パレスの事を思い出し、このホテルで夏の間会議を開催できないかと考えました。

●人々の手作業で行われた修復作業

九五のスイス人家族によって買い取られたコー・パレス

モチューは、夏の間ホテルを借りることが可能かどうかを聞きに、コーを訪れました。しかし、コー・パレスは近々売却される予定になっており、ここで会議を開催するには買い取るしかなかったのです。結局モチューと彼の仲間は、購入の決心を固め、そして一九四六年の五月、九五のスイス人家族の協力を得て、コー・パレスを買い取りました。

ホテルの購入にあたって、人々は

大変な犠牲を払いました。彼らは今でも、まるで奇跡のような当時の出来事を、畏敬の念をもって回想します。ある家族は、自分達の家を建てるのに積み立ててきたお金を、『世界のための家』を買うためにと言って全て寄付しました。人々は、別荘や宝石等それぞれにとっての高価な品々を売却し、そのお金を購入資金のために寄付しました。モチューの料理人であった女性も、自分の二ヶ月分の給料を寄付しました。

人々の手作業で行われたコー・パレスの改装

スイス人家族の代表者達が初めてコー・パレスを訪れた時、彼らは建物のあまりの荒廃にすっかり動揺してしまいました。厨房などはまるで炭坑のような有様だったのです。しかし、九週間後には会議が開催されることが既に決定していました。

修復作業には、ヨーロッパ各地から駆けつけた百数十名の人々が当たりました。各部屋や廊下の掃除、シーツや毛布の洗濯、穴掘り、塗装、金槌を振るっての大工仕事などが昼夜を徹して行われました。

スイスのある繊維業者は、同業の仲間に呼びかけて会合を開きましたが、集まった人々のほとんどが家具などを寄付してくれました。中には二〇〇〇枚のベッドシーツを提供してくれた人もありました。

MRA世界会議場「マウンテンハウス」の誕生

人々の献身的努力の結果すっかり修復されたコー・パレスは、MRAに寄贈され、MRA世界会議場「マウンテンハウス」としてオープンしました。こうして終戦の翌年（一九四六年）より、毎夏「MRAコー世界大会」が開かれることになったのです。

第一回目の世界大会には、戦争中に敵対していたドイツとフランスからの代表をいち早く迎えました。そして、その後一九五〇年までには約五〇〇〇人のフランス人とドイツ人がコーに集まり、和解への道を共に歩み始めたのです。中には、ドイツのコンラッド・アデナウアー首相、フランスのロベール・シューマン外相も含まれていました。それまでの七五年間に普仏戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦と、三回の戦火を交えた国家間のこうした和解の第一歩が、新たな戦争を防ぐために重工業を共同運営するというシューマン・プランへと繋がったのです。このプランは民主ドイツの建設をもたらし、また欧州諸国のより緊密な統合のための布石となりました。

一九五〇年（昭和二五年）には日本からも、広島・長崎の両市長、国会議員、経済人、労働組合代表などからなる七二名の代表団がコーに招かれました。孤立していた当時の日本は、これを契機に国際社会に再び迎え入れられたのでした。

マウンテンハウスはその後も、和解と融和のための対話の機会を世界中の人々に提供し続け、アパルトヘイト下の南アの白人と黒人の代表の対話や、フォークランド紛争直後のイギリス人とアルゼンチン人の対話などを実現して来ました。近年も、対立関係にある旧ユーゴスラビアの人々や、カンボジア各派、あるいはソマリア各部族の代表などを迎え、問題解決の糸口を共に探りました。またベルリンの壁崩壊以来、次々と民主化を果たした東欧諸国からは、すでに数千人にのぼる人々がマウンテンハウスを訪れ、自由や民主主義の道義的・精神的基盤を模索しています。（終）

●戦後 5000 人のドイツ人とフランス人が共にコー世界大会に参加した

●和解の道を模索するソマリア各派の代表

コー五〇周年記念世界大会「過去を癒やし、未来を築く」

コー五〇周年記念世界大会は「過去を癒やし、未来を築く」をテーマに、以下のようなプログラムのもと、約二ヶ月間にわたって開催されました。

◇

①五〇周年祝典
（六月二九日～七月二日）

②岐路に立つヨーロッパ
（七月三～六日）

③未来を築く―二一世紀に備えて
（七月一二～一六日）

④コー円卓会議
（七月二一～二四日）

⑤コー産業人会議
（七月二四～二六日）

⑥信仰、道義的価値、我々の未来
（八月二～七日）

⑦和解への課題
（八月一〇～一五日）

⑧平和の担い手―女性によるイニシアティブ
（八月一九～二三日）

⑨閉会式
（八月二五日）

◇

世界各国、延べ約二五〇〇名にのぼる参加者に混じって、日本からも羽田孜元首相、遠藤實ジュネーブ駐在大使ご夫妻、関西日本スイス協会派遣の中学生六名など、約七〇名が参加しました。

〔開会式〕

「コーの目的とスイス外交の目的とは一致しております。それは世界平和への貢献です」「私たちは戦争が始まる前に、人々を交渉のテーブルにつかせなければなりません。それこそが、コーで行われていることなのです」（以下、発言は全て要旨）

七月二日の開会式には、スイス政府を代表して祝辞を述べたジーン・フランソワ・ルーバ・スイス議会議長他、フランソワ・クシュパン・スイス首相、一七ヶ国からの駐スイス大使、ローマ教皇大使、地元モントルー市の代表などが出席しました。

また、ヘルムート・コール独首相からは「戦後コーは、かつて敵同士であった国々の間に和解をもたらす上で重要な貢献をしました」「MRAは、五〇年間にわたる有益な和解促進活動の蓄積を用いることができます。コーの役割は少しも減っていません。憎しみと狂信は、今日においても、世界中に血なまぐさい争いを引き起こしています」というメッセージが寄せられました。

〔岐路に立つヨーロッパ〕

開会式の翌日、七月三日から六日にかけて開催された会議「岐路に立つヨーロッパ」では、ヨーロッパ内外からの多数の参加者により、二一世紀の世界における、ヨーロッパの課題と役割について話し合いがなされました。

ドイツのカトリック教会の代表的指導者であり、他の教会や宗教との対話を積極的に行ってきた、ヘルマン・ヨーゼフ・シュピタル司教は講演の中で、「世界中から集まった様々な背景を持つ人々により、相互理解に基づいた関係作りが図られてきたこのコー会議は、大変素晴らしいものであると思います。私たちはコーに、『関係』というものの意義を見出すことが出来ます。普遍的な概念である愛・尊敬・友情・信頼、これらは皆、人間相互間の関係に依ってい

●マリアン・ライト・エーデルマン子供防衛基金代表による、コー50周年記念講演

るのです。」「私たちはお互いに依存しあってこの世界に生きています。一人の人間として生きるということは、他の人々と共に生きるということなのです。強制・束縛の反対は、勝手気ままにするということではありません。それは、『関係』についての選択の自由を持つということなのです。自由は、人々の間に信頼と連帯をもたらすものであるべきです。自由は、目的ではなく、目的へ向けての第一歩なのです」と述べ、人間相互間の関係というものの重要性を強調すると共に、対話と相互理解により、その「関係」を望ましいものにしていくことを訴えました。

〔未来を築く―二一世紀に備えて〕

一二ヶ国から参加した若者が中心となって企画・運営した会議「未来を築く―二一世紀に備えて」には、哲学者、科学者、宗教家、ジャーナリスト、ビジネスマン、NGO関係者、教師、学生、主婦など、様々な分野・世代の人々が参加し、世界が抱える二一世紀へ向けての課題について話し合いました。

会議初日には、異なった宗教間の対話を目的とするパネル・ディスカッションが行われ、チベットの仏教指導者ダライ・ラマ一四世や、元ウィーン大司教のフランツ・ケーニッヒ枢機卿、ワシントンのジョージ・メイソン大学で宗教と紛争解決について教鞭をとるユダヤ教ラビのマーク・ゴピン博士、スイス・プロテスタント教会連盟代表のハインリッヒ・ルスターホルツ牧師などがパネリストとして参加しました。

ダライ・ラマ一四世は、「二〇世紀がもし戦争と紛争の世紀であるならば、二一世紀は対話の世紀となるべきです」「二一世紀には、貧困諸国の更なる発展が見られることでしょう。しかし、もし私たちが物質的充足ばかり追い求めたならば、その発展は不完全なものとなります」「私たちの将来は、私たちが心に希望を持つことが出来るか否かにかかっています。希望が、私たちの精神と決意を支えてくれるのです」「温かい心を持つことが大切です。哲学や宗教は私たちの、隣人に対する愛や思いやりの心を育ててくれます」と語りました。

●ダライ・ラマ14世とフランツ・ケーニッヒ枢機卿

〔コー円卓会議〕

続いて開催されたコー円卓会議には、日本からは賀来龍三郎キヤノン会長を初めとする五名が参加しました。「グローバル経済における企業の役割」をテーマに開かれたこの会議では、雇用創出、仕事と家庭の関係、汚職などの問題について話し合いがなされました。

〔和解への課題〕

八月には「和解への課題」が開催され、コーの半世紀にわたる紛争解決・信頼醸成の軌跡を振り返ると共に、二一世紀の世界の平和のためにコーが果たすべき新たな役割について話し合いがなされました。

二日目、三日目には、戦略国際問題研究所（CSIS）、総合研究開発機構（NIRA）およびMRAの共催で、シンポジウム「二一世紀に向けての和解への課題」（助成：国際交流基金）が行われました。紛争解決に直接関わった人々や、国連関係者、各国の政治家、政策立案者などが参加したこのシンポジウムには、日本からも羽田孜元首相、鳩山由紀夫衆議院議員、星野進保総合研究開発機構（NIRA）理事長、渋沢雅英東京女学館理事長が参加しました。

〔新しい役割―二一世紀を対話の世紀に〕

約八週間にわたって開催されたコー五〇周年記念世界大会は、八月二五日に閉会式を迎えました。

九五の市井のスイス人家族によって設立されたマウンテンハウスは、この半世紀の間に、数多くの和解と融和を世界にもたらしてきました。その役割は、来る二一世紀を対話の世紀とするため、今後ますます大きくなることでしょう。（終）

CAUXを訪ねて

住友海上火災保険株式会社
鈴木富士夫

●マーセル・グランディー・コー財団理事長ご夫妻と記念撮影

四半世紀ぶりのスイス

朝五時半、窓のカーテンがようやく薄明るくなる頃、私はもう待ちきれずにベッドを出て窓を開けた。その瞬間、目の前に広がる大パノラマに思わず「わぁー」と声が出てしまった。広々とした緑の芝生が手前から向こうへなだらかに下っており、その行き着く先は石畳の遊歩道になっていた。そして散歩道の手摺の向こうは一気に切れ落ちており、はるか下のほうにまだ弱い光の中で、レマン湖が青々とした水を湛えていた。更に湖の向こうには、氷河に削られた三〇〇〇メートル級の山々が屏風のようにそびえ立ち、その頂近くに今昇ったばかりの朝日が当たり、うっすらとピンクに染まっていた。

ひんやりと心地よい朝の冷気の中で、耳を澄ますと鳥達の囀りに加えて、どこからともなくカウベルの音が聞こえてきた。矢も楯もたまらず部屋を飛び出し、まだ誰もいない広い芝生を突っ切って遊歩道の手摺のところまで行った。見下ろすと、足下から湖面までの急斜面には茶と白の斑の牛が草をはんでおり、遙か眼下にはモントルーの街、そして湖岸が緩く突き出しているところには中世の名城シオン城が小さく見えた。昔学生の頃、あの城を尋ね歩いた挙げ句、遙か山の中のスィオン村に行ってしまった懐かしい思い出が甦った。

家族や職場、そしてMRAの多くの先輩達のお陰で、およそ四半世紀ぶりにスイスのこの地に立つことが出来た。嬉しさと感謝の気持ちが、心の底からわき上がってきた、と同時に、この二四年間に自分は人間としてどれだけ成長しただろうかという疑問に捕らわれていた。今回のサマーミーティングへの参加も、二四年前同様、自分探しの旅の続きかも知れない。

振り向くと、マウンテンハウスの二つの尖塔にも朝日がとどき、金色に輝き始めていた。百年前に建てられたこの素晴らしい建物で、これから何が始まるのか全く分からないが、自分を信じてぶつかっていくしかないと覚悟を決めた。

小グループに分かれての会議参加

参加者はあらかじめコミュニティーと呼ばれる小グループに分けられ、それが滞在中の基本単位となっていた。何の予備知識も無い私は、ともかく指定された時間に自分のコミュニティールームに行ってみた。小さな部屋には既に二〇人ほどのメンバーが円形に並んだ椅子に座っていた。その顔ぶれは実に多彩で、肌の色は白、黒、黄色、年齢もローティーンから八〇歳位までと様々だ。また、皆が積極的に発言するのには驚いた。若者は物怖じせず、年長者も権威ぶらず、なごやかに話し合いは進んでいった。一回り自己紹介が終わり、今回の会議のテーマである『未来の創造―二一世紀へ向けて』を受けて、自分の為、または自国の為に何をすべきか、について自由討議が始まった。「これはえらい所に来てしまった。何とか逃げ出す口実はないか、腹痛って英語で何て言うんだっけ」などと考えているうちに、司会者が「さて、まだ一度も発言していない人は？」と言うと、皆の目が私を見た。頭に血がのぼって考えをまとめる間も無く、「個人レベルでも国家レベルでも教育の改革が必要で、一人ひとりが価値観を物質的なものから精神的なものへ転換していかなければならない」といったことを話したように思う。毎日一一時のこのミーティングは、英語に難のある私にとって大変だったが、とても勉強になった。

一方、皆で協力して行う食事の配膳作業はとても楽しいものだった。六〇〇人分の食器類を並べ、料理を温めながらサービスすることから始まり、皿洗いと後片づけまでの作業は、確かに想像を絶するものだった。しかし広い厨房の中を走り回りながら、互いにファーストネームで呼び

合い助け合う中で、あっと言う間に仲良くなっていた。

ダライ・ラマ一四世

五日間の会議期間中、毎日講演やコンサート、映画、劇など様々なプログラムが用意されていたが、私の参加した七月一二～一六日のミーティングで特筆すべきは、ダライ・ラマ一四世ではなかったかと思う。彼がマウンテンハウスにやってきた日は、皆朝から興奮と緊張を隠すことが出来なかった。玄関で皆と一緒に待っていた私の目の前にいきなり数台の車が止まり、いつものチベットの僧衣に身を包んだダライ・ラマが降りてきた。彼は私達に向かって暖かく微笑み、合掌しながら玄関ホールの人垣の中へ入っていった。その間、私は金縛りにあったように、カメラのシャッターを切ることも忘れていた。そして呪縛が解けた後も、彼の暖かさが全身に流れてくるような心地よさがあった。

彼は、パネルディスカッションとその後の講演の中で、深い洞察力と示唆に富んだ多くの言葉を我々に残してくれた。二〇世紀は血なまぐさい戦争の世紀だったが、二一世紀は対話の世紀にしなければならないこと、全人類は全て自分の延長線にあり皆つながっていること、個人個人が有機体の一つとして宇宙を見なければならないこと、そしてその為の実践的試みとして瞑想し、自分の心を分析し、過去に対して反省することをあげられた。

パネルディスカッションの途中、ちょっとしたハプニングが起きた。パネリストの一人が話をしている最中に、通路まで埋め尽くした聴衆の中からヨチヨチ歩きの小さな子供が一人、さして高くないステージによじ登り、ダライ・ラマの足下に歩いて行ったのだ。壇上の人達はテーブルが邪魔をして誰も気づかぬようだった。しかし聴衆は全員どうなることかと息をのんだ。その時、ダライ・ラマは、そ知らぬ顔でテーブルの下から手を伸ばし、その子をあやし始めた。そしてもう一方の手で、クスクス笑いだした聴衆に騒がぬよう合図を送った。子供は床にペタンと座ると、今度はダライ・ラマの素足とサンダルをいじり出した。これには彼もたまらず、「わっはっは」と大声で笑いだし、固唾をのんで見守っていた聴衆もドッと湧いた。もしくすぐったさを我慢できたなら、彼はその子をずっと遊ばせていただろう。彼がその場に存在するだけで、誰もが包みこまれるような大きな愛を感じることの出来たひとときだった。

希望を持って

CAUXでは見ず知らずの人でも、目が合えば笑顔で挨拶する。困っている人を見かけると頼まれなくても相談に乗り、次の食事に誘う。期間中このような場面を幾度となく経験した。「CAUXに来ると『思いやり』の魔法をかけられる」と聞いたことがあったが、本当だった。楽しい思い出と多くの友人を得た。しかし私が、サラリーマンという日常の中から思い切ってこの大会に参加したのは、自分自身を見つめ、自分の何かを変えるきっかけを掴みたかったからだ。その意味では、今回の経験は私にとって出発点に過ぎない。自分のことと同様に相手のことを思いやることの大切さ、多くの人と心を開いて対話することの難しさを痛感した。しかしより良い世界を創る為には、我々一人ひとりがそれを実現しなければならない。しかもCAUXの魔法が解けた後でも、である。最後にもう一度、ダライ・ラマの言葉を噛み締めたい。「希望を持って！」（終）

コー世界大会に参加して

南港南中学校三年　三好絵里

関西日本・スイス協会から、約3週間の日程でスイスに派遣されていた青少年交流使節団の荒木保裕君、伊加賀正子さん、上田裕也君、菱江佑佳さん、廣瀬愛さん、三好絵里さんの6名が、8月11日から13日までコーを訪れ、「和解ー日本と国際社会」などの会議に参加しました。

古城を修築して生まれたというマウンテンハウスで行われたMRA世界大会。ここでは、数々のセッションやワークショップ、クッキングなどを世界各国の方々と一緒に行え、何ものにも代えられない貴重な体験ができました。参加人数が多くてマウンテンハウスに泊まれなかったのは残念だったけれど、それでも世界の人々と会話を交わすことができたのは、とてもうれしいことでした。

◇

今回の会議は「和解」というテーマでしたが、体験談も含めて貴重なお話をたくさん聞くことができ、平和について深く考えさせられた三日間でした。強烈に印象に残っているのが、ある女性の方が話していた、七歳の女の子からきたという手紙の話です。「一歳半の時に、戦争で父親を殺された。今でも父親と一緒に遊んでいる子供を見ると怒りを覚える。」手紙にはこう書いてあったそうです。それを聞いた時、今までこんな悲惨なことが起きている地域があることも忘れ、のんびり暮らしてきた自分が恥ずかしくなりました。その他にも、ラオスから来た難民だという方が、その悲惨な状況を切々と語られていました。私は、そういう現実は情報として、知ってはいても、実際に目で見ることはなかったので、自分には遠い話しだと思っていました。けれども今回、そういう戦争や紛争の真っ只中にいる人のお話を聞き、日本が平和だからいいというのではなく、大きなこと（戦争を止めることなど）は今できなくても、現実から目を背けたりしないで少しでも理解することだけでも大事なことなのだということを痛感した。そして会議では日本人の参加者も多く、その方々の戦争体験の話しも聞くことができました。

◇

ところで、今回この会議を通じて一番強く感じたことは、「相手の罪を互いに許し合うこと」の大切さです。ある日本人女性が、「夫を殺した人が憎くて憎くて仕方がなかったけれど、MRAに参加して『許す』ことによって救われた」という人の話をして下さいました。私はもしもそれが自分だったら―大事な家族や友達の命が奪われたとしたら―と考えると、とても殺した人を許す気にはなれないという答えしか出てきません。なぜ、その人は「許す」ことができたのかを聞く時間もなくコーを出発しなければならなかったのが残念です。けれども、許して救われたことによって憎しみの気持ちが消えたというのは、今紛争などが起きている地域に必要なことだと思います。憎いから、許せないから戦うのであって、その気持ちを変えるのは大変なことだけど、お互いが一歩ゆずることによって、その憎しみがなくなれば、戦争を減らすこともできると思います。和解に一番必要なのは、「許す」ことではないでしょうか。

◇

MRAに参加して、様々な人と出会い、話しを聞くことも出来て、本当に良かったと思います。会議以外でも、ホテルで参加者の一人が「Hello」と知らない同士なのに声をかけてくれたことや、南アフリカの方がお土産を下さったり、日本人スタッフの方々にも親切にして頂いたり、良いことずくめで過ごすことができた私は本当に幸せだと思いました。そして、辛さを乗り越えて自分の体験を語って下さった人々は、私に「現実を見なければならないこと」を教えて下さいました。この経験を今後の人生に活かしていくことこそ、私に課された責務だと思います。そして、機会があれば是非もう一度コーに行きたいと思います。（終）

第一九回MRA関西秋季大会レポート

●全体会議での劉氏、スーベル氏、イラル氏、ネヤ氏（右から）

七五名が参加した関西秋季大会

震災復興の槌音がこだまする神戸で、恒例の関西秋季大会（一〇月一二～一三日、於：住吉研修所）が七五名の方々の参加を得て開催されました。

「世界の中のアジアの役割」―アジアは二一世紀の要請に応えることができるか―をテーマに行われた今回の会議には、カンボジア、インド、マレーシア、台湾から、長年MRAの活動に関わってきた五名の方々をゲストとして迎えました。

眼下に神戸港を見下ろす緑豊かな会場で、コーのマウンテンハウスにも負けない暖かい雰囲気の中にも、熱い対話がなされました。

アジア各国からの声

アジア各国からのゲストは、パネルディスカッションや分科会を通して、各々の国の実情と彼らの活動内容、そして日本に対する期待について次のように述べました。（以下、発言は全て要旨）

東インドのビルマ国境ナガランドから来日したニケトゥ・イラル氏（インドMRA専従）は、愛する故郷が、深刻な政治や経済の問題を抱える隣国バングラデシュとビルマからの難民と軍隊であふれかえってしまうかも知れないという危機感を述べ、そしてフランク・ブックマン博士（MRAの創始者）の「日本はアジアの灯台たれ」という言葉を引用し、「日本のみが、この状況を平和的に解決できる」との期待を表明しました。

過去の経験を前向きに生かし、未来を築く努力を

マレーシアのハリダス・ネヤ氏（マレーシア教育財団専務理事）は、「日本には原理・原則が無い。何を感じ、何をしようとしているのか見えてこない」と指摘した上で、「決して過去に怯えることなく、その経験を生かして未来を違うものしていく努力を」と呼びかけました。また教育関係者である立場から、「教育とは内面化される過程である。学んだことを本当に内面化・内在化させ、自分のものとしない限り、本当の精神や心の一部にならない」と述べました。

台湾の劉仁州氏（台湾MRA専従）は、家庭などでの個人的な経験から、「静かな時間を持ち、内なる声を聞く」ということについて次のように話しました。「電話をかけようと思って受話器を耳に当てても、ダイヤルを回さなければ話は聞こえてこない。あなたが真剣に問いかければ、内なる声も真剣に答えを返してくれる筈だ」

失って初めてわかる『自由』の重み

戦乱で荒れ果てたカンボジアで、私財をなげうって孤児院を運営して

●分科会（右端が五十嵐氏、左端がアレブ君）

●熱心に話し合う参加者の皆さん

いるソン・スーベル氏（国会副議長・大学教授）は、カンボジアに対する、近年の日本の公的及び私的な援助に心から感謝の言葉を述べました。しかし同時に「言論や投票の自由・権利というのは、失ってみて初めてその重みがわかるものだ」と、我々日本人にとって耳の痛い指摘もありました。

スーベル氏は最後に、「全世界に通じる共通の価値観を持った『アジアの共同体』を創りたい」と夢を語り、「そのためには、まず自分から始めなければならない」と結びました。

友達を紛争で失ったインドの大学生の話に胸を詰まらせる

イラル氏の甥で大学生のアレブ君は、小さい頃から、（民族や宗教の相違を要因とする）紛争に否応なく巻き込まれ、友達がゲリラとして死んでいったという体験を話してくれました。その話を聞いた、同年代の息子を持つ女性参加者は、アレブ君の姿に自分の息子を重ね合わせ、その不幸な状況に思わず涙を流しました。そして、「平和な日本に生きている自分たちが、世界のためにしなければならないことを自覚した」と発言し、皆の感動を呼びました。

アジアの人々と苦労を分かち合う

一方、日本の参加者からは「自分がアジア人だという感覚が無い」といった発言もありましたが、アジアウェーブ編集長の五十嵐勉氏の「日本人はもっと実際に現地に行き、現地の人たちと苦労を分かち合うことが必要だ」という発言に、会場から賛同の拍手がわき起こりました。

日本に対する期待にどう応えていくか

日頃聞くことのできない、アジアの人々の生の声を聞けたことは、今後の日本の進むべき道や、我々一人ひとりの生き方を考える上で、大きな収穫となりました。参加者全員が、人種や国境をこえて個人と個人の深いつながりを築くことができた二日間でした。

しかし、アジア各国の人々から示された日本に対する期待を、我々はどう受け止め、それにどう応えていくのか―出された宿題は、とても大きいと言わざるを得ません。（終）

関西世話人会　鈴木富士夫

CAUX コー世界大会'97

テーマ「明日の世界―
積極的な相互理解を目指して」

□プログラム□

◆7月12～13日
開会式

◆7月15～20日
コー産業人会議―真の価値観を大切にするリーダーシップの育成

◆7月22～28日
人生における信仰の意味を探る

◆8月5日～12日
ワークショップ―日々の生活・芸術・社会における、'創造性''自由'そして'奉仕'

◆8月14～20日
過去を癒やし、未来を築く―正義と和解を目指した対話

◆8月20～23日
コー円卓会議―メインテーマ「企業の役割」

◆8月23～24日
閉会式

MRAワールドニュース

世界のMRA最近の動き

◆インド独立五〇周年記念会議に三五〇人が参加

R・D・マトゥー（MRAインド）
マイク・ブラウン（MRA豪州）

「ハッピー・ニュー・イヤー（よい年をお迎え下さい）」アウン・サン・スーチーさんは、アジア・プラトー（インドのパンチガニーにあるMRAアジアセンター）で開かれたインド独立五〇周年記念会議（一月三～七日）に寄せた基調演説の最後にこう記した。

スーチーさんは「人々の心や精神の自由なくして、真の自由などありえない」と断言した上で、インドの若者に対し「あなた方に与えられた使命は、常に社会的価値観や自分自身の動機を再確認する必要に迫られる分、植民地主義と戦う以上に困難である」と語った。

◇

スーチーさん本人が参加されていたら、私たち同様に心を動かされたに違いない。近くの村々の一六の学校から集まった生徒たちが、アジア・プラトーの背後にある高原で行われた開会式で、誓いの言葉を朗読した。「すべてのインド人よ。今こそ憎しみや無関心という呪縛から自由になろう・・・」生徒たちのある者は鮮やかな色のターバンやサリーを身につけ、ある者は制服姿で、三五〇人の会議参加者と多くのパンチガニー住民のために、祖国インドへの愛を歌と踊りで表現してくれた。

●開会式では地元の学校の生徒たちが歌や踊りを披露した

◇

以下は、「二〇世紀から学び、二一世紀に備える」というテーマの下に開催された同会議で、特に印象深かった点である。

①今回の会議は、開催国であるインドに深く根ざしたものとなった。地元のマハラシュトラ州からも多くの参加があった。プログラムには農村地域からの参加者が、その豊かな文化と精神的遺産を披露する機会もうけられた。パンチガニー青年会議のメンバーの一人はパンチガニーの町とアジア・プラトーとの間で始まった対話は、今後も続けていかねばならないと語った。

②会議の運営に協力してくれたのは「インド改善のための青年連合」のメンバーや、過去に行われたMRAユース・キャンプに参加した三四名を含む優秀な若者で、会議の数週間前から事前準備に携わった。懸命な仕事ぶりで貢献したのはもちろんのこと、その熱意と信念をもって、会議を大いに盛り上げた。彼らの多くは、すでに社会改善事業で活躍している。

③これらの若者の意気込みや活気に応えたのが、ビジネスおよび産業

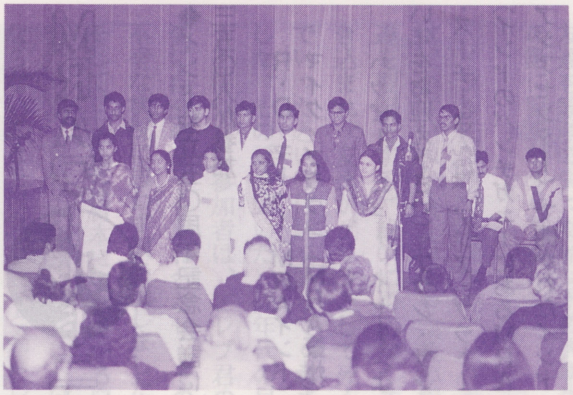
インド会議へのアウン・サン・スーチーさんのメッセージ（抜粋）

自由は選択を伴う。私たちは小さく固まって自己本位の生き方をすることもできれば、心を広く解き放って、多くの人々のニーズや希望に応えていく道を選ぶこともできる。二一世紀は、全ての人々により大きな安全と幸福をもたらす環境作りという点では、かつてない程の好機を与えてくれることだろう。しかし同時に、物質主義が蔓延して、正義や思いやりなどの効力を踏みにじる危険な時代となる危険性も秘めている。

この世には、国境や時代を超えて伝えられてきた価値観が存在する。また、私たちが生きているこの時代に、見出さねばならない価値もある。これらの価値を見出すというチャレンジは、若い人たちの肩にかかっている。朝の清々しさにも似た若さをもって、新しい世界を築いていってほしい。感謝の念と熱意をもって、このチャンスを生かしてほしい。この機会を逃せば、個人も国も、取り返しのつかないほどの後退を余儀なくされることになるだろう。

界の人々であった。インドで急速に進む自由市場経済に見合った新たな工業文化をつくりあげようと努力している人々である。この動きを、参加者の一人は「精神面での貧困化を招くことなく、経済的豊かさを実現するためのチャレンジ」と表現した。

④プログラムの三分の一で、プロのコンサルタント率いるオープン・スペース・プロセスという方式が採用された。これによって参加者は、興味のあるテーマを選んで小グループを形成し、現状の分析にとどまらず、具体的な行動計画を話し合うことができた。テーマは多岐にわたり、環境、廃棄物処理、安全な飲用水の確保、汚職撲滅のための非暴力的な戦い、教育改革、ヘルスケアにおける倫理、インドとパキスタン間の橋作り（同テーマに関しては、始めは両国の良好な関係など不可能だと主張していた一人の若者が現在もコーディネーター役をつとめている）などについて議論が行われた。



●大活躍したインドの若者たち

⑤グループの一つは、かつての「ヒンマット」のような、倫理面での意識向上を目的とした雑誌を刊行したいと考え、実現への可能性をさぐる計画を立てた。

⑥インドの少数民族で、深刻な緊迫状態を抱えているジャルクハンド（ビハール州）やボドー（北東インド）の人々とも、有意義な対話が行われた。ヒンズー教徒とイスラム教徒の問題に関しても、率直な意見交換が行われた。

●主催者のひとり、ラジモハン・ガンジー・インド政策研究所教授

⑦マグサイサイ賞の受賞者であるキラン・ベディ元デリー警察監察官が、ビジョンにあふれた閉会の辞を述べた。

⑧会議には、マレーシア高等教育推進協会会長のダトー・パドゥカ・サレハ氏、カンボジア国会副議長のソン・スーベル氏、米国ユダヤ教ラビのマーク・ゴピン氏をはじめとする、一八ヶ国からの参加者があり、新たなレベルの国際交流を象徴していた。

⑨かつてアジア・プラトーの設立に関わった仲間や友人が、家族を連れて会議に参加した。中には何十年ぶりにやってきた人もいた。しかし自己の信念を貫いてきたその生き方は、会議にも大きく貢献した。（終）

翻訳　高橋千恵

（同会議には、日本からも五十嵐勉アジアウェーブ編集長をはじめとする五名が参加しました）

◇

▽事務局通信△

●去る一月にインドのMRAセンター「アジア・プラトー」で開催されたインド独立五〇周年記念会議に参加した、イエンツ・ウィルヘルムセン氏（ノルウェーMRA理事）と、スレッシュ・カトリ氏（フィジーMRA専従）が、インドからの帰路日本に立ち寄り、東京、小田原、浦和、大阪など各地でMRA関係者と交流を深めました。

●事務局員異動のお知らせ

・長年専従として事務局につとめてきた藤田幸久・玲子夫妻が、昨年九月末日をもって退職いたしました。

・新たなスタートを切った事務局は本年一月に、清田和彦（現在当協会理事・住友電気工業株式会社から出向中）、藤田賢（同顧問・元日本開発銀行）の両氏を迎えました。

・私、加藤保之は、四月からは非常勤スタッフとして編集業務等に携わることになりました。

●フィリピン・ミンダナオ島のダバオ市で開催されたミニ・アジア太平洋青年会議（一九九六年一二月二六～二九日）に、日本からも浅見昌代さん、塚本真由子さん、事務局・長野清志の三名が参加しました。詳しくは、次号のIMAJレポートでご報告いたします。